

「楽しかった」が一番

河内千春

2008年秋から「日本語でドラマを作る」というクラスを実践してきた。初級後半～中級レベルの留学生が自分たちで演劇作品を作ることを中心とするクラスである。

2010年夏のIAPL大会で発表したときに、今後の課題として「社会的メッセージはどの程度必要か」「教室活動をどこまで演劇にするのか」の2つを挙げた。その後の活動の中で、この2つの課題はどう解決できたのだろうか。

社会的メッセージを持った演劇とは、原発・憲法・水・ジェンダーのような世界的に注目されているテーマを取り入れた演劇作品を作り、今何が起きているのかを明らかにすることや、それに対する自分たちのメッセージを伝えることである。

毎回のクラスでテーマについて話し合ってもらっているが、社会的メッセージよりも「男女の恋愛」「家族の絆」のような身近なテーマのほうがよいという学生が多い。日本的な行動の特徴などを誇張して入れたり、流行っていることを入れたりするもある。初級後半から中級という学生の日本語レベルを考えると、それで十分であると思う。

教室活動については、全15回の授業のうち、オリエンテーションと2～3回のウォーミングアップ活動の後、グループに分かれ、自分たちでストーリーを考え、台本を作る。台本をもとにして台詞を覚え、身体を動かして演じる。完成したものを発表する。学期最後に作成過程の振り返りを行う。このスタイルは初めから変わっていない。

発表を劇場で行いたいと思ったこともあるが、劇場を使うとなると、照明や音響などそれなりの準備が必要となる。限られた時間の中では、役を演じることが日本語能力の上達に結びつけられればよい。劇場でなくても「教室演劇」でよいと思われる。

この2つの課題の他にも、毎回予期せぬトラブル、新たな気づきがあった。この3年間の「日本語でドラマを作る」クラスの活動を振り返って、まとめてみたい。